

茨城県教育財団文化財調査報告第373集

満倉北遺跡

一般県道鴻野山豊岡線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県常総工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第373集

み て ぐ ら き た
満 倉 北 遺 跡

一般県道鴻野山豊岡線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県常総工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、一般国道や主要地方道などの広域的な交通ネットワークの整備を推進しています。

その一環として茨城県常総工事事務所は、常総市豊岡地区において、一般県道鴻野山豊岡線道路改良事業を計画しました。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である満倉北遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県常総工事事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成23年8月から9月までの2か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、満倉北遺跡の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県常総工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、常総市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木欣一

例　　言

- 1 本書は、茨城県常総工事事務所の委託により、財団法人茨城県教育財團（現 公益財団法人茨城県教育財團）が平成 23 年度に発掘調査を実施した。茨城県常総市豊岡町字満倉乙 3555 の 8 番地ほかに所在する満倉北遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
　調査 平成 23 年 8 月 1 日～9 月 30 日
　整理 平成 24 年 8 月 1 日～9 月 30 日
- 3 発掘調査は、調査課長樺村宣行のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	皆川 修
主任調査員	本橋弘巳
調査員	佐藤一也
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、次席調査員坂本勝彦が担当した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = 6,080 m, Y = 12,040 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …, 西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j、西から東へ 1, 2, 3, … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット SD - 溝跡 SF - 道路跡 SI - 壁穴住居跡 SK - 土坑

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 施釉	 粘土・炭化材範囲	 煤		
● 土器	○ 土製品	□ 石器・石製品	△ 金属製品	--- 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。計測値の単位は m, cm, g で示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 遺構の主軸方向は、長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SK23 → 第 1 号粘土貼土坑

欠番 SD 3, SK 1 · 3 ~ 8 · 10 · 12 · 14 ~ 16

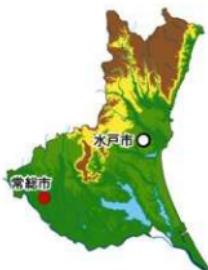
目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
満倉北遺跡の概要	1
第1章　調査経緯	3
第1節　調査に至る経緯	3
第2節　調査経過	3
第2章　位置と環境	4
第1節　地理的環境	4
第2節　歴史的環境	4
第3章　調査の成果	9
第1節　調査の概要	9
第2節　基本層序	9
第3節　遺構と遺物	10
1　奈良時代の遺構と遺物	10
堅穴住居跡	10
2　その他の遺構と遺物	13
(1) 道路跡	13
(2) 粘土貼土坑	14
(3) 土坑	16
(4) 溝跡	18
(5) 遺構外出土遺物	22
第4節　まとめ	27
写真図版	PL 1 ~ PL 6
抄 錄	

みて ぐら きた 満倉北遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

満倉北遺跡は、常総市の中央部に位置し、鬼怒川右岸の南北に細長く伸びる標高約22mの台地南部に立地しています。一般県道鴻野山豊岡線道路改良事業とともに、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成23年度に1,000m²について発掘調査を行いました。



調査の内容

調査区は、遺跡の東部にあたる台地平坦部に位置しています。調査の結果、奈良時代の堅穴住居跡、時期不明の道路跡や粘土貼土坑、溝跡などが確認できました。主な出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器（剥片）、鉄製品（釘）などです。



調査区全景（東上空から）



調査中の住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



調査区西部完掘状況



第1・2号住居跡出土土器

調査の結果

縄文時代の遺構は確認されていませんが、縄文土器片 70 点が出土しています。おおよそ前期（約 6,000 年前）から後期（約 4,000 年前）の土器片であることが分かりました。周辺の遺跡からも縄文土器が数多く出土しており、縄文時代の人々が、当遺跡を含む周辺地域で生活を営んでいたと考えられます。

奈良時代の遺構は、竪穴住居跡 2 軒を確認しました。遺跡の所在する豊岡町域では奈良時代の住居跡の調査例がなく、当町域では初めての確認となります。1,300 年前の人々の暮らしの痕跡が一部でも明らかになったことで、今後も当遺跡を含む周辺遺跡の調査から、地域の歴史の一端が解明されていくことが期待されます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成20年11月5日、茨城県常総土木事務所（平成21年4月から茨城県常総工事事務所）長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道鴻野山豊岡線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成21年1月28日に現地踏査を、平成22年4月23日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成22年8月27日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県常総工事事務所長あてに、事業地内に満倉北遺跡が所在すること、及びその取扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成22年11月8日、茨城県常総工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成22年12月28日、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県常総工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成23年3月16日、茨城県常総工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道鴻野山豊岡線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年3月22日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県常総工事事務所長あてに、満倉北遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團（平成24年4月から公益財團法人茨城県教育財團）を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、茨城県常総工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成23年8月1日から9月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

満倉北遺跡の調査は、平成23年8月1日から9月30日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	8月			9月	
調査準備 表土除去 遺構確認					
遺構調査					
遺物洗浄 注記 写真整理					
補足調査 撤収					

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

満倉北遺跡は、茨城県常総市農岡町字満倉乙 3555 の 8 番地ほかに所在している。

常総市は、関東平野のほぼ中央部、茨城県の南西部に位置している。市の東側を小貝川、中央部を鬼怒川、西側を飯沼川が南北に流れおり、またそれらに注ぐ支流が市域を縦横に流れている。市域の地形は、東部に低地が開け、西部に台地が発達している。東部の低地は、鬼怒川・小貝川の氾濫原に堆積した標高 12 m 前後の沖積平野で、現在は豊かな水田地帯が広がっている。西部に位置する台地は、結城市から常総市にかけての結城台地と、利根川に平行して古河方面から取手市に延びる猿島台地に分けられる。結城台地は、鬼怒川と飯沼川により開拓された標高 20 ~ 24 m の平坦で比較的起伏の少ない台地で、猿島台地は、飯沼川と菅生沼や鬼怒川が横断している標高 15 ~ 20 m の平坦な台地である。また両台地は、細長く南に延びており、一部に谷頭があり組んでいる。

地質の構成は、沖積低地部と台地部では異なった地質構成を示し、沖積低地部では、河川堆積物である砂礫層が堆積し、小貝川や鬼怒川の氾濫時に形成された厚い泥炭層の堆積が見られる。台地部では洪積層に限られ、武蔵野段丘とみられる成田層群の上部成田層を基盤とし、河川の氾濫原に堆積した龍ヶ崎砂礫層、青灰色粘土の常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。

当遺跡は結城台地の南部、常総市の中央部にあたり、鬼怒川右岸の南北に谷津があり込む標高約 22 m の台地平坦部に位置している。当遺跡の立地する台地は幅が約 800 m と狭くなってしまっており、周辺には谷津が複雑に入り込んでいる。台地上は畠地として、低地は水田として利用されている。

第2節 歴史的環境

蛇行して南流する鬼怒川と飯沼川に挟まれた標高約 22 m の台地上には、谷津田に面した緑辺部を中心に満倉北遺跡をはじめ多くの遺跡が確認されている。ここでは周辺地域の遺跡の概要について述べる。

縄文時代の遺跡は、後期から晩期の遺物や骨角器が出土した大生郷貝塚を包含する飯沼川左岸の金戸遺跡（27）、前期と中期の集落跡が確認された大生郷遺跡²⁾（33）、鬼怒川右岸の台地に立地する大日遺跡（49）、墓地遺跡（44）、貝柄山遺跡（41）などが確認されている。貝柄山遺跡は、1941 年に日本古代文化学会によって調査が行われ、草期の貝殻条痕文系土器やヤマトシジミを中心とする貝類が出土し、小貝塚群として確認されている³⁾。

弥生時代の遺構については、当遺跡周辺では現在のところ確認されていない。

古墳時代の集落は、当遺跡周辺では縄文時代の遺跡と複合して確認される場合が多く、前・中期は河川にのぞむ冲積地や水田周辺の低台地周縁に多く確認され、後期になると谷津の周縁や台地の深遠部に分散している。七塚古墳群（11）は 1947 年に清野謙次、1960 年からは吉田章一郎によって学術調査が行われ、古墳 6 基が確認され、直刀・埴輪・須恵器片などが出土している。貝塚古墳（5）は、1958 年に上智大学史学会の調査により、円墳 1 基と埴輪円筒棺が確認されている⁴⁾。

奈良・平安時代の当地域は、下総国岡田郡飯塚郷に属していたと考えられており、下総国の国府は、現在

の千葉県市川市国府台付近に比定されている。当遺跡周辺の主な遺跡としては、奈良時代中期の集落跡が確認された大生郷遺跡、奈良・平安時代の土器が散布する南袋遺跡^②(23)、香取西遺跡^③(30)、久保遺跡^④(46)、馬場遺跡^⑤(21)、宮原前遺跡^⑥(28)などがあげられる。宮原前遺跡からは、奈良時代の住居跡19軒、平安時代の住居跡10軒のはか、県内初となる連結竪穴造構が確認されている。また、当遺跡から北に約6.5kmの国生地区内に国生本屋敷遺跡があり、1986年には旧石下町、1988年には国立歴史民俗博物館による2回の発掘調査が行われている。1986年の調査では、堅穴住居跡2軒、住居跡状造構26か所のはか、L字状を呈し、断面が箱築研状の大溝を確認するとともに、「丈」と墨書きされた土器や朱書きの土器などが出土している^⑦。1988年の調査では、大溝が古墳時代前期の豪族居館を囲む堀であることが確認された。また、7世紀後半の方形に巡る溝跡と掘立柱建物跡が確認され、初期官衙的な性格付けがなされている^⑧。この国生地区内には、下総國司桑原王が宝亀3年(772)に創建したとされる延喜式内社の桑原神社もあり、国生本屋敷遺跡の遺構や出土遺物、周辺の地名などから岡田郡衛比定地とされている。10世紀以降は常総平氏を中心に、平将門の一族及び他族間の抗争の地となり、数多くの伝説を残している。

中世になると当地域は豊田荘となり、豊田氏の興亡に大きな影響を受けている。豊田氏は下妻・小栗・東条・鹿島氏等の常陸平氏一族とともに源頼朝の軍勢と抗争を繰り返すが、鎌倉幕府開府後は御家人として存続している。戦国期には、小貝川西岸の微高地に築かれた豊田城を中心に小田氏と連携して支配を強めるが、その後下妻の多賀谷氏に滅ぼされる。関ヶ原合戦時に豊臣方についた多賀谷氏も領地を没収され、以後当地域は徳川幕府の直轄地や旗本の領地となる。当該期の遺跡としては、方形堅穴状造構6基と土坑墓43基などが確認された三本松遺跡^⑨(15)のはか、馬場遺跡、宮原前遺跡などが確認されている。当遺跡から南東に約15kmの飯沼地区には、応永21年(1414)、良肇により弘経寺が創建されている。戦国期には多賀谷氏が当寺で陣を張り、戦火によって堂宇が焼失する災難にも見舞われたが、2度の再建を果たしている。弘経寺は徳川秀忠の娘である千姫の菩提寺としても知られ、千姫の墓所やゆかりの品々が現在も遺されている。これらの品々、また当地域に遺された数多くの文化財は、当時の面影を今日に伝えている。

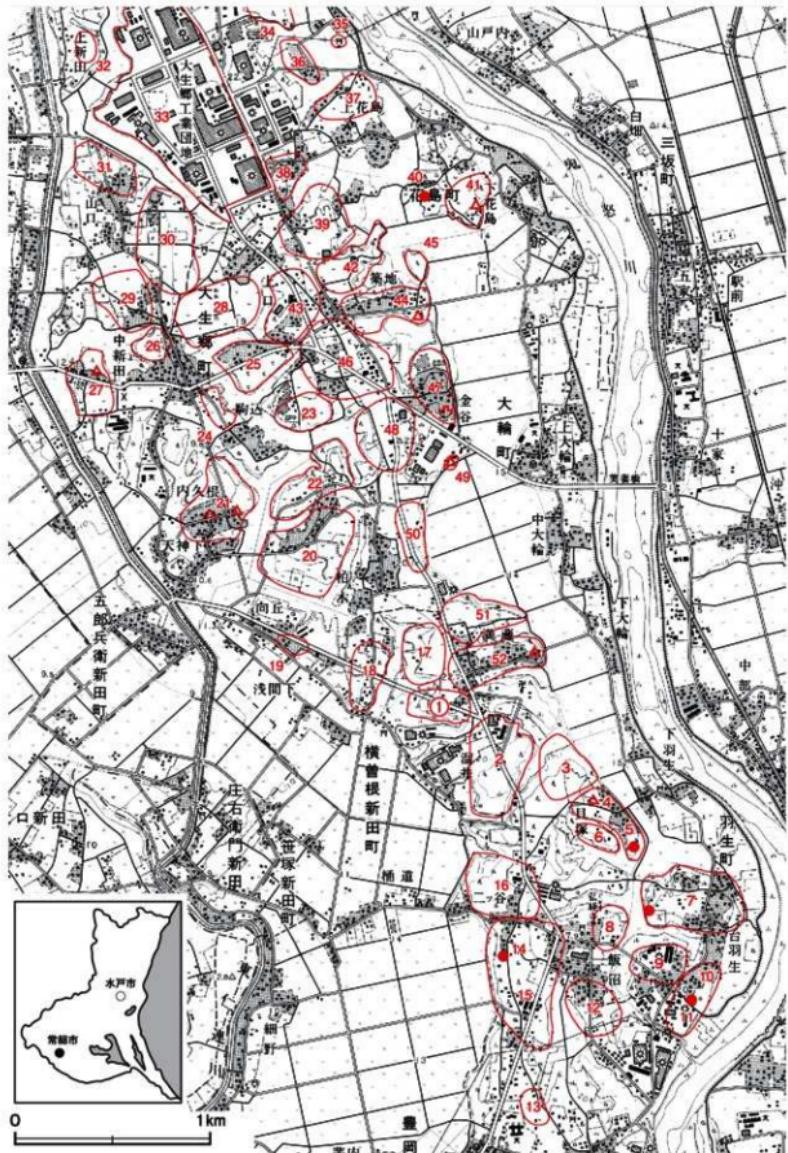
*文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の当該番号と同じである。なお、本章は『茨城県教育財團文化財調査報告』第335集を基にし、若干加筆したものである。

註

- 1) 水海道市史編さん委員会「水海道市史 上巻」水海道市 1983年3月
- 2) 桜井二郎「大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書－大生郷遺跡－」茨城県教育財團文化財調査報告 XI 1981年9月
- 3) 茨城県史編さん第一部会「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」茨城県 1979年3月
- 4) 茨城県史編さん原始古代部会「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」茨城県 1974年2月
- 5) 斎藤和浩「宮原前遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財團文化財調査報告」第335集 2011年3月
- 6) 川井正一他「国生本屋敷遺跡発掘調査報告書」「石下町史資料」第1集 石下町史編纂室 1987年3月
- 7) 阿部義平編「茨城県常総市国生本屋敷遺跡発掘調査報告」「国立歴史民俗博物館研究報告」第129集 国立歴史民俗博物館 2006年3月
- 8) 大間武「一般国道354号(水海道バイパス)道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 前原遺跡 大門通遺跡 三本松遺跡」「茨城県教育財團文化財調査報告」第114集 1996年6月

参考文献

- 水海道市史編さん委員会「水海道市史 上巻」水海道市 1983年3月
石下町史編さん委員会「石下町史」石下町 1988年3月



第1図 満倉北遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1 「水海道」）

表1 満倉北遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	満倉北遺跡	○			○				27	金戸遺跡	○		○	○			
2	満倉東遺跡	○		○	○				28	宮原前遺跡	○			○	○		
3	貝塚乙遺跡	○							29	四ツ谷遺跡	○		○	○			
4	貝塚甲遺跡	○		○	○				30	香取西遺跡	○		○	○			
5	貝塚古墳			○					31	前中丸遺跡	○		○	○			
6	貝塚丁遺跡	○							32	後中丸南遺跡	○						
7	中坪遺跡	○		○	○				33	大生郷遺跡	○		○	○			
8	寿龜山遺跡	○					○		34	雉子尾前遺跡	○		○	○			
9	野村遺跡	○		○	○				35	香取遺跡	○			○			
10	前原遺跡			○					36	露ヶ島遺跡			○	○			
11	七塚古墳群			○					37	薬師西遺跡	○		○	○			
12	大門通遺跡			○		○			38	大橋遺跡	○						
13	觀音堂遺跡	○							39	高野台遺跡				○			
14	郷原古墳			○					40	下花島古墳群				○			
15	三本松遺跡			○	○				41	貝柄山遺跡	○		○	○			
16	虎松山遺跡	○		○					42	天王原遺跡	○						
17	安戸東遺跡	○		○					43	大部堂遺跡	○		○	○			
18	入山遺跡	○		○	○				44	築地遺跡	○	○	○	○			
19	向山遺跡	○		○	○				45	天神山遺跡	○		○	○			
20	柏木遺跡	○		○	○				46	久保遺跡	○		○	○			
21	馬場遺跡	○		○	○	○			47	大輪陣屋跡	○		○	○			
22	小野台遺跡	○		○	○				48	榎下遺跡			○	○			
23	南袋遺跡	○		○	○				49	大日遺跡	○						
24	芝崎遺跡	○		○					50	大塚遺跡	○		○	○			
25	中根遺跡	○		○	○				51	古寺家遺跡	○						
26	中新田遺跡	○		○	○				52	満藏遺跡	○		○	○			



第2図 満倉北遺跡調査区設定図（常総市地形図2500分の1から作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

満倉北遺跡は常総市の中央部に位置し、遺跡の範囲は南北210m、東西330mほどで、調査区は遺跡東部の平坦部に位置している。調査面積は1,000m²で、調査前の現況は畠地である。

調査の結果、堅穴住居跡2軒（奈良時代）、道路跡2条、粘土貼土坑1基、土坑19基、溝跡7条（いずれも時期不明）を検出した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に2箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢)、土師器(壺・甕)、須恵器(壺・高台付壺・甕)、土師質土器(皿・培培・鉢・さな)、瓦質土器(七厘・鉢・鍋カ)、陶器(天目茶碗・碗・皿・擂鉢・甕)、磁器(碗・鉢・段重・徳利・水注)、石器(剥片・磨石)、鉄製品(釘)などである。

第2節 基本層序

調査区西部の台地平坦部にあたるA18区にテストピットを設定し、深さ1.9mまで掘り下げて基本土層の観察を行った。以下、観察結果から層序を説明する。

第1層は、現在の耕作土である。層厚は34～57cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・縮まりとともに普通で、層厚は1～17cmである。

第3層は、暗褐色を呈するソフトローム層である。粘性・縮まりとともに普通で、層厚は5～19cmである。

第4層は、にぶい褐色を呈するハードローム層である。ガラス質粒子を微量に含み、粘性は普通で、縮まりは強く、層厚は5～15cmである。始良Tn火山灰(AT)を含む層と考えられる。

第5層は、暗褐色を呈するハードローム層である。

粘性・縮まりとともに強く、層厚は25～37cmである。

第2黒色帯と考えられる。

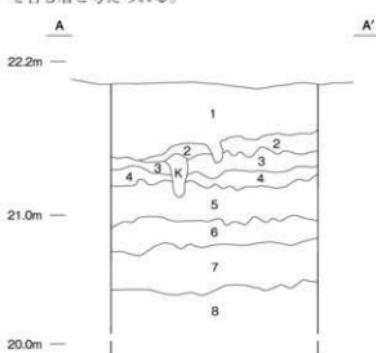
第6層は、褐色を呈するハードローム層である。

粘性・縮まりとともに強く、層厚は15～30cmである。

第7層は、明黄褐色を呈する粘土層への漸移層である。粘性は極めて強く、縮まりは強く、層厚は26～41cmである。

第8層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・縮まりともに極めて強く、層厚は39cmまで確認したが、下層は未掘のため不明である。

なお、遺構は第2層上面で確認した。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡2軒を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴住居跡

第1号住居跡（第4・5図）

位置 調査区中央部のB319区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東部及び南西部が調査区域外に延びているため、東西軸4.70m、南北軸3.00mしか確認できなかった。方形または長方形と推定され、主軸方向はN-14°-Wである。

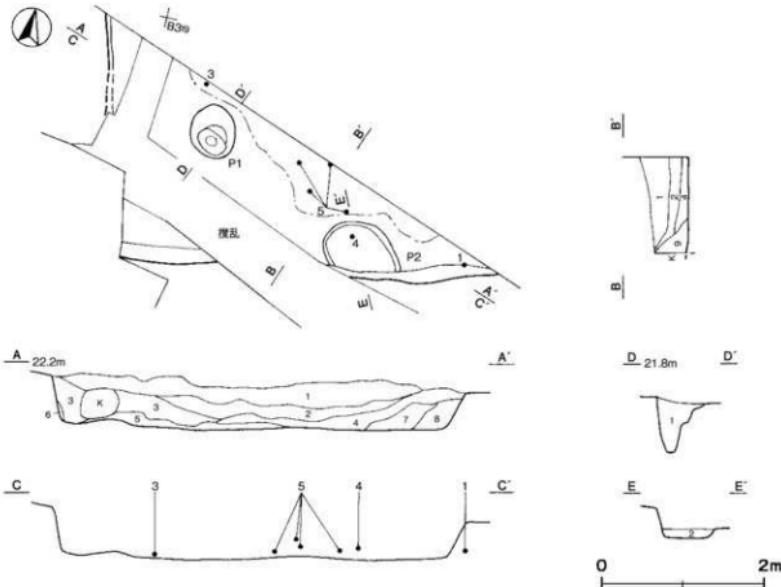
床 ほぼ平坦で、住居の中央部にあたる、北東側の調査区域際で硬化した面を確認した。

ピット 2か所。P1は深さ69cmで、規模と配置から主柱穴であると考えられる。P2は深さ11cmで、位置や硬化面の広がりから出入口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説（各ピット共通）

1 桐 色 ロームブロック中量

2 桐 色 ロームブロック少量



第4図 第1号住居跡実測図

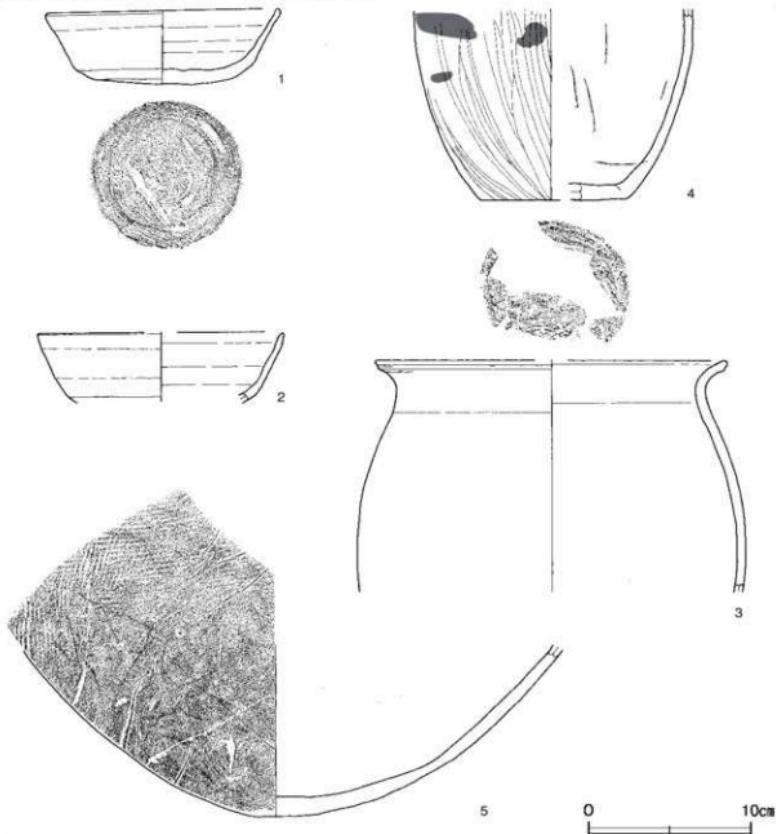
覆土 9層に分層できる。第1・2層は、含有物とレンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。第3～9層は比較的明るい色調で、多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒 色	ローム粒子微量	6 黒 色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子少量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量	9 暗褐色	ローム粒子少量
5 閑 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片30点(坏7、壺23)、須恵器片11点(坏4、壺7)が出土している。3は西部の床面から、1・4は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。5は南部の覆土下層から出土した破片4点が接合したものである。2は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	壺	142	47	90	長石・石英・ 黑色粒子	灰黄	普通	口クロナデ 体部下端・底部斜軸ヘラ削り 割面2か所「一」字	覆土下層	70% PLA
2	須恵器	高台付壺	[149]	(43)	-	長石・石英・ 黑色粒子	灰黄	普通	口クロナデ	覆土中	10%
3	土師器	甕	[21.6]	(14.3)	-	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位ナデ 内面ヘラナデ	床面	10% PLA
4	土師器	甕	-	(11.7)	90	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナデ後ヘラ削き 内面ヘラナデ	覆土下層	40% PLA
5	須恵器	甕	-	(10.6)	3.7	長石・石英	灰	良好	体部外面部位の平行タキ 内面ナデ	覆土下層	20% PLA

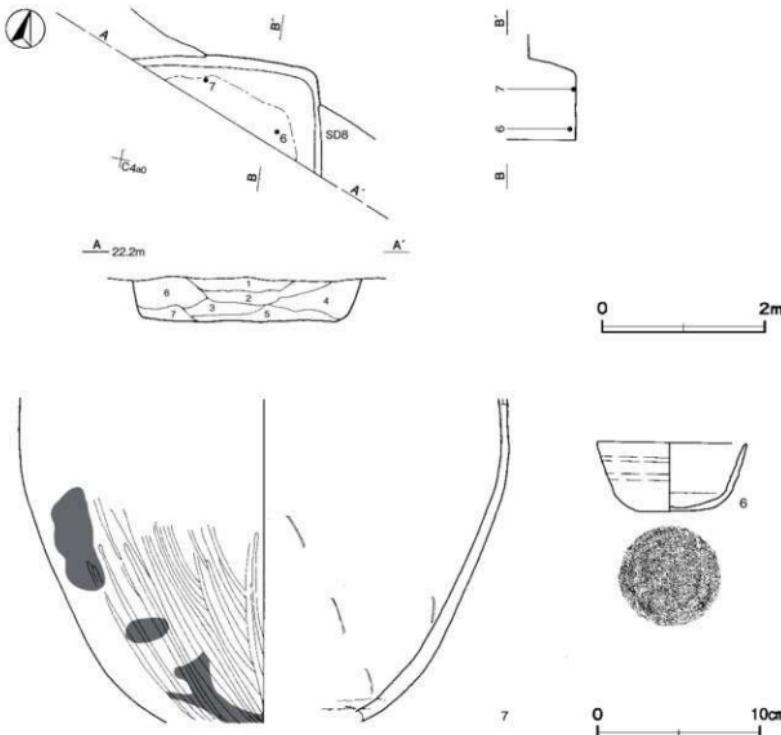
第2号住居跡（第6図）

位置 調査区東部のB 4j0 区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 上部を第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東コーナー部を残して、大部分が調査区域外に延びているため、東西軸 2.20 m、南北軸 1.25 m しか確認できなかった。方形または長方形と推定される。

床 ほぼ平坦で、住居の中央部にあたる、南側の調査区域際で硬化した面を確認した。



第6図 第2号住居跡・出土遺物実測図

覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第7層は含有物から窓構築材の一部と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック微量	5	暗褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ロームブロック中量	6	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物微量
4	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片2点(甕),須恵器片1点(环)が出土している。7は北東部の床面,6は同じく覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。

第2号住居跡出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
6	須恵器	环	9.2	4.2	6.0	長石・雲母	灰オリーブ	良好	ロコナデ	底部多方向のヘラ削り	覆土下層	90% PLA
7	土師器	甕	-	(199)	-	長石・石英・雲母・鐵礫	にほい橙	普通	底部外側ナゲ後ヘラ磨き	内面ヘナナデ	床面	25% PLA

表2 奈良時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規格 長幅×短幅 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土物	時期	備考	
								主柱穴	玄入口	ビット	重					
1	B309	方形、長方形	N-14°-E	(4.70×3.00)	46-57	平坦	-	1	1	-	-	-	自然、人為	土師器、須恵器	8世紀前葉	
2	B400	方形、長方形	-	(2.20×1.25)	57	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	土師器、須恵器	8世紀前葉	本路→SD8

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明らかでない道路跡2条、粘土貼土坑1基、土坑19基、溝跡7条を確認した。道路跡、粘土貼土坑、溝跡は文章で記載し、土坑については実測図と一覧表のみの掲載とする。

(1) 道路跡

第1号道路跡(第7・20図)

位置 調査区東部のC 5c3 ~ C 5d3区、標高22 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 C 5d3区の北部から北東方向(N-54°-E)

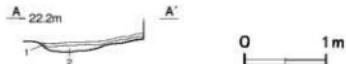
にはほぼ直線状に延び、調査区外に至っている。確認できた長さは2.00 mである。幅は1.97 mで、掘り込みの深さは9 cmである。断面は浅いU字状で、ロームブロックを少量含む褐色土の第2層の上に、ロームブロックを中心含む褐色土の第1層を埋土し、上面を突き固めて構築されている。

構築土 2層に分層できる。第1層は締まりが極めて強く、上面が硬化している。

土層解説

1	褐色	ロームブロック中量、鐵微量(締まり極めて強い)	2	褐色	ロームブロック少量、鐵微量
---	----	-------------------------	---	----	---------------

所見 近代以降に作成された区割図に掲載されている道路とはほぼ一致している。土器が出土していないことから、構築時期は不明である。



第7図 第1号道路跡実測図

第2号道路跡（第8・20図）

位置 調査区東部のC 4 a6～C 4 b8区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。



第8図 第2号道路跡実測図

規模と形状 C 4 a6区の南部から北東方向（N - 78° - E）にはほぼ直線状に延び、調査区域外に至っている。確認できた長さは82.5mである。確認できた上幅は1.44mで、掘り込みの深さは23cmである。断面は浅いU字状で、ロームブロックを多量に含む暗褐色土と褐色土を4回に分けて埋めし、第1・2層の上面を突き固めて構築されている。

構築土 4層に分層できる。第1層は縮まりが極めて強く、上面が硬化している。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック多量（縮まり極めて強い）	3	褐色	ロームブロック多量
2	暗褐色	ロームブロック多量（縮まり強い）	4	暗褐色	ロームブロック多量

所見 近代以降に作成された区割図に掲載されている道路とはほぼ一致している。土器が出土していないことから、構築時期は不明である。

表3 その他の道路跡一覧表

番号	位置	方 向	形 状	規 模				主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	層厚(cm)		
1	C5c3～C5d3	N - 54° - E	【直線】	(200)	1.97	-	9	（浅い）U字状 砂質	人骨 SD7→本跡
2	C4a6～C4b8	N - 78° - E	【直線】	(82.5)	(1.44)	-	23	（深い）U字状 砂質	人骨

(2) 粘土貼土坑

第1号粘土貼土坑（第9図）

位置 調査区西部のB 1 a8区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸231m、短軸134mの長方形で、長軸方向はN - 67° - Wである。深さは42cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。壁の全面に厚さ7～28cm、床の全面に厚さ2～10cmの粘土が貼られている。

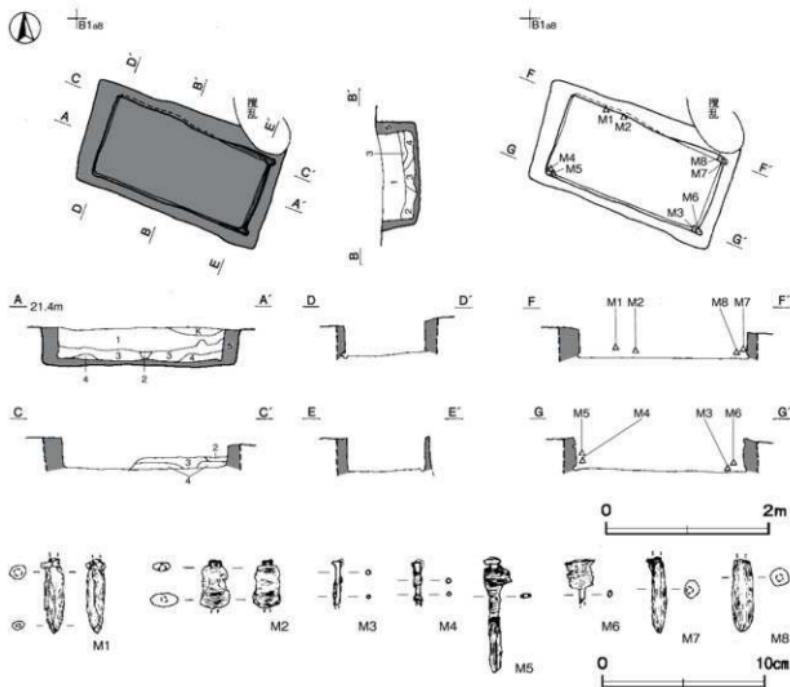
覆土 5層に分層できる。第5層が粘土層である。

土層解説

1	暗褐色	炭化物・ローム粒子、砂粒少量	4	暗褐色	砂粒中量、粘土粒子少量、炭化物微量
2	にぬ・黄褐色	砂粒中量、粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量	5	浅黄色	白色粘土ブロック多量、ローム粒子少量
3	暗褐色	粘土ブロック中量、砂粒少量、炭化物微量			

遺物出土状況 鉄製品32点（釘）が出土している。M 1・M 2は北部、M 7・M 8は東コーナー部、M 3・M 6は南コーナー部、M 4は西コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。M 5は西コーナー部の覆土中層から出土している。

所見 木質が付着した釘が多数出土していることから、木枠を利用した墓坑や水溜め、肥溜め等の可能性を考えられるが正確な用途は不明である。時期は、丸釘が明治期以降に輸入または製造されていることから、近代以降と考えられるが明確な時期については不明である。

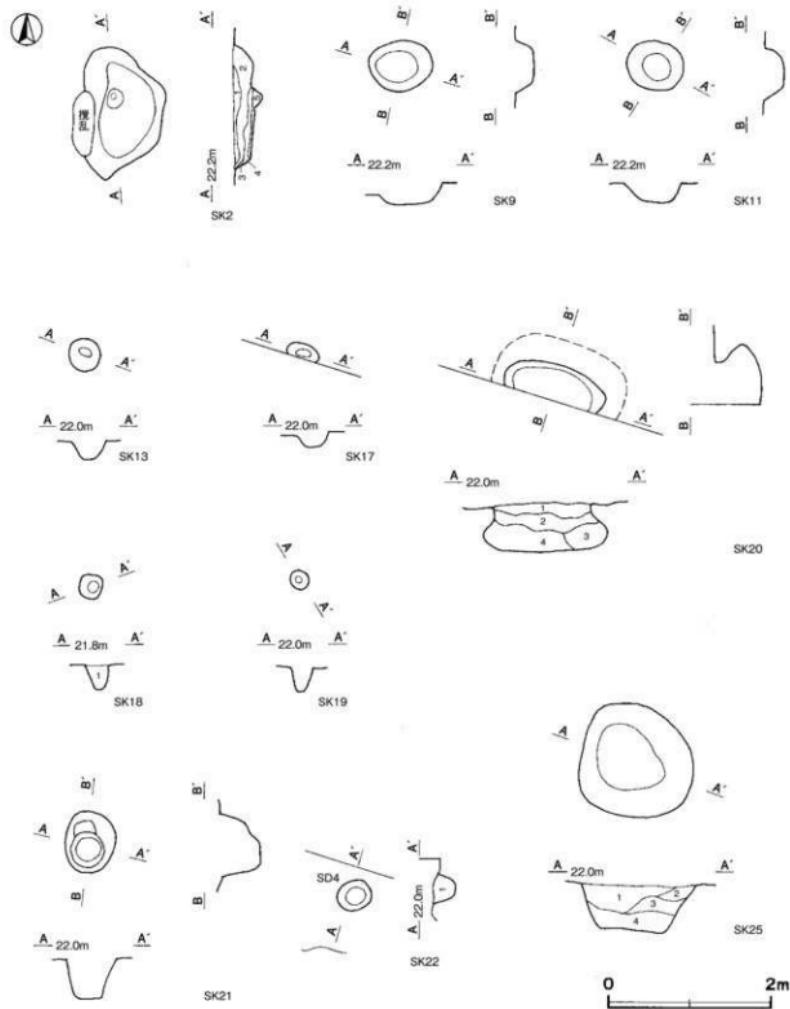


第9図 第1号粘土貼土坑・出土遺物実測図

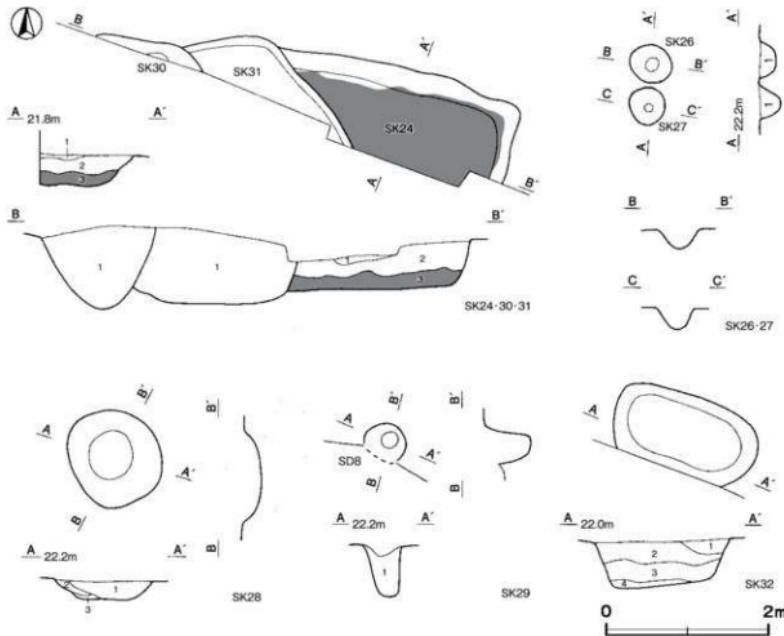
第1号粘土貼土坑出土遺物観察表（第9図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	釘	(4.5)	0.5	0.4	(3.7)	鉄	頭部欠損 断面丸 木質付着	覆土下層	PL6
M 2	釘	(29)	0.7	0.6	(2.9)	鉄	欠損 断面丸 木質付着	覆土下層	PL6
M 3	釘	(29)	0.4	0.3	(1.3)	鉄	欠損 断面丸 木質付着	覆土下層	PL6
M 4	釘	(28)	0.6	0.3	(1.7)	鉄	欠損 断面丸 木質付着	覆土下層	PL6
M 5	釘	7.1	1.0	0.3	5.0	鉄	断面丸 木質付着	覆土中層	PL6
M 6	釘	(27)	0.6	0.4	(1.5)	鉄	欠損 断面丸 木質付着	覆土下層	PL6
M 7	釘	(47)	0.4	0.4	(3.6)	鉄	頭部欠損 断面丸 木質付着	覆土下層	PL6
M 8	釘	(45)	0.4	0.4	(5.0)	鉄	頭部欠損 断面丸 木質付着	覆土下層	PL6

(3) 土坑(第10・11図)



第10図 その他の土坑実測図（1）



第 11 図 その他の土坑実測図 (2)

第 2 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

第 18 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第 20 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・砂粒微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第 22 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

第 24 号土坑土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子多量、炭化物中量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黑褐色 炭化物多量、ローム粒子少量、焼土粒子微量

第 25 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量

第 26 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第 27 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第 28 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第 29 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第 30 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 31 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

第 32 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

表4 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	B2c9	N - 2° - E	不定形	1.66 × 0.98	36	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
9	B2d5	N - 80° - E	椭円形	0.78 × 0.63	23	平坦	緩斜	不明		
11	B2d6	N - 61° - W	椭円形	0.69 × 0.62	24	平坦	緩斜	不明		
13	B2e5	-	円形	0.39 × 0.38	23	圓状	緩斜	不明		
17	B3f1	N - 71° - W	椭円形	0.40 × (0.17)	18	平坦	緩斜	不明		
18	B2b1	-	円形	0.30 × 0.30	29	圓状	外傾	人為	縄文土器	
19	B2d5	N - 32° - W	椭円形	0.25 × 0.20	27	平坦	緩斜	不明		
20	B2c2	N - 71° - W	[椭円形]	1.28 × (0.44)	73	平坦	内傾	人為		
21	B2c8	N - 0°	椭円形	0.76 × 0.62	48	平坦	外傾	不明		
22	B3f1	N - 70° - E	椭円形	0.43 × 0.34	29	平坦	緩斜	人為		本跡→SD4
24	B1b9	N - 74° - W	[方形・長方形]	(2.40 × 1.14)	33	平坦	外傾	人為	炭化物	本跡→SK31
25	C5a3	N - 53° - E	椭円形	1.55 × 1.40	53	平坦	外傾	人為	土器	
26	B4j9	-	円形	0.52 × 0.48	23	圓状	緩斜	人為		
27	B4j9	-	円形	0.45 × 0.45	27	圓状	緩斜	人為		
28	B5j1	N - 45° - E	椭円形	1.25 × 1.07	20	圓状	緩斜	人為		
29	B4j8	N - 23° - E	[椭円形]	0.53 × (0.44)	58	平坦	外傾	人為		SD8と重複
30	B1b8	-	[方形・長方形]	(1.40 × 0.18)	103	圓状	外傾	人為		SK31→本跡
31	B1b8	N - 33° - W	[方形・長方形]	(0.98 × 0.60)	96	平坦	外傾	人為		SK24→本跡→SK30
32	C3b5	N - 22° - E	[椭円形]	1.35 × (0.90)	59	平坦	外傾	人為		

(4) 溝跡

第1号溝跡（第12・20図）

位置 調査区中央部のB 4 f3～C 4 a4 区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 C 4 a4 区の北部から北方向 (N - 10° - W) に直線状に延び、調査区外に至っている。確認できた長さは 4.96 m である。規模は上幅 0.31 ～ 0.54 m、下幅 0.10 ～ 0.27 m、深さ 8 ～ 20 cm である。断面は U字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高差はほとんど認められない。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 埋 土色 ロームブロック少量

所見 近代の区割図の土地区分とほぼ一致することから、土地区分に関わる溝と推定される。土器が出土していないことから、時期については不明である。



第12図 第1号溝跡実測図

第2号溝跡（第13・20図）

位置 調査区西部から中央部のA 1j0～B 3e3 区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5号溝に掘り込まっている。

規模と形状 B 3e3 区の北部から西方向（N - 71° - W）に直線状に延び、確認できた長さは40.80mである。

規模は上幅0.26～0.69m、下幅0.05～0.26m、深さ8～26cmである。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高は、東部が高く、西部に行くに従ってわずかに低くなっている。

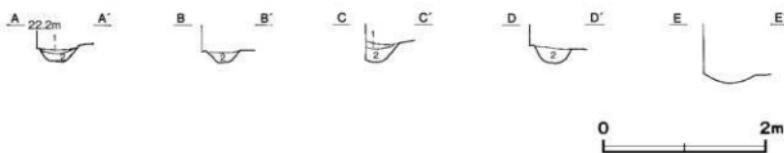
覆土 2層に分層できる。両層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 細 開 色 ロームブロック・砂粒少量、焼土粒子微量 2 暗 極 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片9点（深鉢）、土師器片1点（环）、須恵器片1点（环）、土師質土器片4点（皿1、焰烙1、鉢2）、磁器片2点（碗、德利）、鐵製品2点（釘、不明）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 現道にはば並行していることから、旧道の側溝と考えられる。出土土器から近世以降と考えられるが、明確な時期については不明である。



第13図 第2号溝跡実測図

第4号溝跡（第14・20図）

位置 調査区中央部のB 2d0～B 3i0 区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第22号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 B 3i0 区の東部から西方向（N - 70° - W）に直線状に延び、確認できた長さは31.65mである。

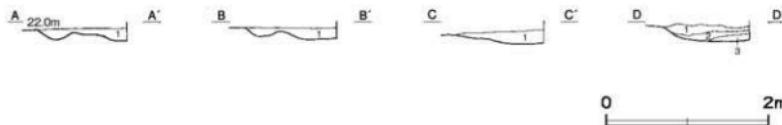
規模は上幅0.05～1.26m、下幅0.05～0.78m、深さ7～16cmである。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高は、東部が高く、西部に行くに従ってわずかに低くなっている。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 細 開 色 ロームブロック微量 3 暗 極 色 ロームブロック少量

2 細 開 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量



第14図 第4号溝跡実測図

遺物出土状況 繩文土器片10点(深鉢), 土師器片7点(甕)が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 現道にはほぼ並行していることから、旧道あるいは側溝の可能性が考えられる。遺構に伴う土器が出土していないことから、明確な時期については不明である。

第5号溝跡（第15・20図）

位置 調査区中央部のB 2b9～B 2c9区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 B 2c9区の中央部から北方向(N-3°-W)に直線状に延び、調査区域外へ至っている。確認できた長さは290mである。規模は上幅0.32～0.45m、下幅0.18～0.25m、深さ8～18cmである。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高差はほとんど認められない。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 細褐色 ロームブロック少量

所見 近代の区割図の土地区分とほぼ一致することから、土地区分に関わる溝と推定される。土器が出土していないことから、時期については不明である。



第15図 第5号溝跡実測図

第6号溝跡（第16・20図）

位置 調査区東部のC 5d4～C 5e6区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 C 5e6区の北東部から西方向(N-70°-W)に直線状に延び、調査区域外へ至っている。確認できた長さは10.10mである。規模は上幅0.36～0.50m、下幅0.24～0.35m、深さ36cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高差はほとんど認められない。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックや礫が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

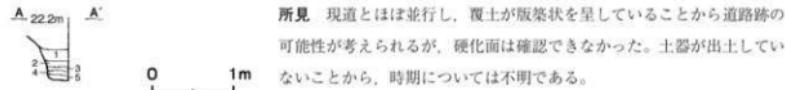
1 細褐色 ロームブロック・礫少量

4 細褐色 ロームブロック微量

2 細褐色 ロームブロック少量、礫微量

5 黄褐色 ロームブロック少量

3 細褐色 ロームブロック中量



所見 現道にはほぼ並行し、覆土が版築状を呈していることから道路跡の可能性が考えられるが、硬化面は確認できなかった。土器が出土していないことから、時期については不明である。

第16図 第6号溝跡実測図

第7号溝跡（第17・20図）

位置 調査区中央部から東部のB 2j2～C 5d3区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝跡を掘り込み、第1号道路に掘り込まれている。第2号道路跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 B 2 j2 区から東方向 (N - 109° - E) に直線状に延び、確認できた長さは 34.85 m である。確認できた規模は上幅 0.52 ~ 0.82 m、下幅 0.12 ~ 0.26 m、深さ 22 cm である。断面は U 字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高は、西部が高く、東部に行くにつれてわずかに低くなっている。

覆土 3 層に分層できる。ロームブロックや礫が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 細 磨 色 磷少量、ロームブロック微量
- 2 細 磨 色 ローム粒子少量

- 3 細 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 繩文土器片 2 点 (深鉢)、土師質土器片 1 点 (鍋)、陶器片 2 点 (皿、甕)、磁器片 3 点 (碗 2、鉢 1)、瓦片 2 点が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 現道にはほぼ並行し、覆土が版築状を呈していることから道路跡の可能性が考えられるが、硬化面は確認できなかった。出土土器から近世以降と考えられるが、明確な時期については不明である。



第 17 図 第 7 号溝跡実測図

第 8 号溝跡 (第 20 図)

位置 調査区東部の B 5 i6 ~ C 5 d0 区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 2 号住居跡を掘り込んでいる。第 29 号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 C 5 d0 区の西部から西方向 (N - 70° - W) に直線状に延び、確認できた長さは 28.73 m である。確認できた規模は上幅 0.12 ~ 0.85 m、下幅 0.05 ~ 0.35 m、深さ 8 ~ 35 cm である。壁は外傾して立ち上がっている。底面はやや起伏が見られるが、標高差はほとんど認められない。

遺物出土状況 繩文土器片 1 点 (深鉢)、土師器片 6 点 (甕)、須恵器片 1 点 (甕) が出土している。いずれも細片のため図示できない。

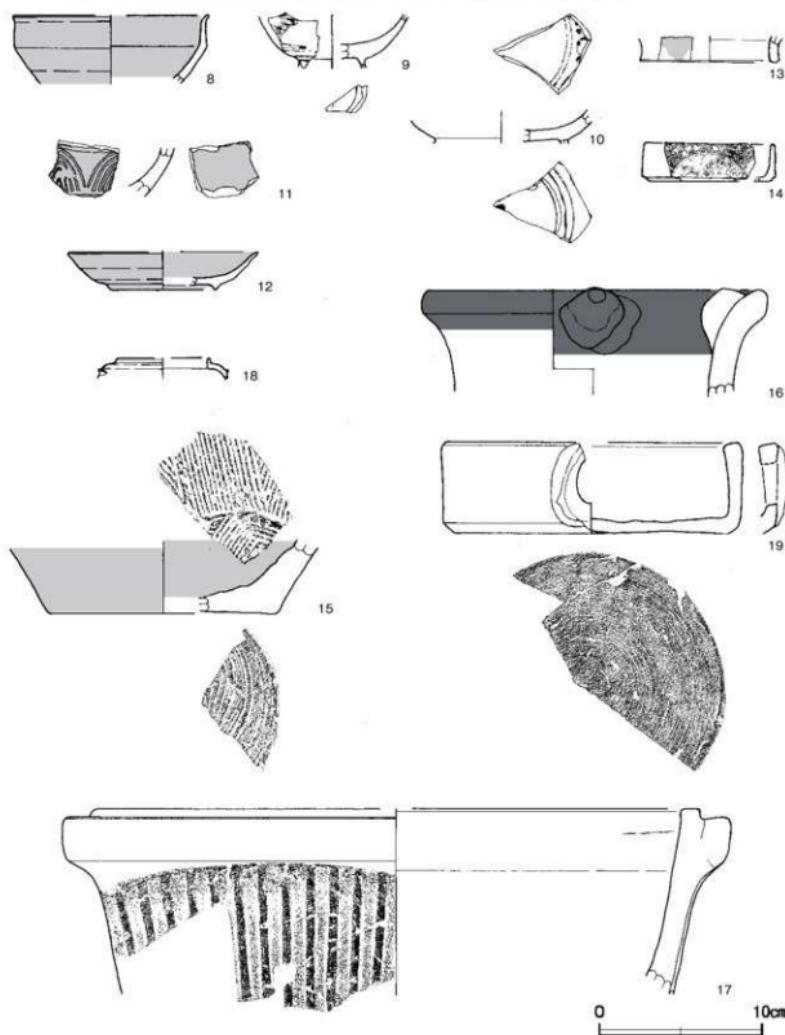
所見 現道にはほぼ並行していることから、旧道あるいは側溝の可能性が考えられる。遺構に伴う土器が出土していないことから、時期については不明である。

表 5 その他の溝跡一覧表

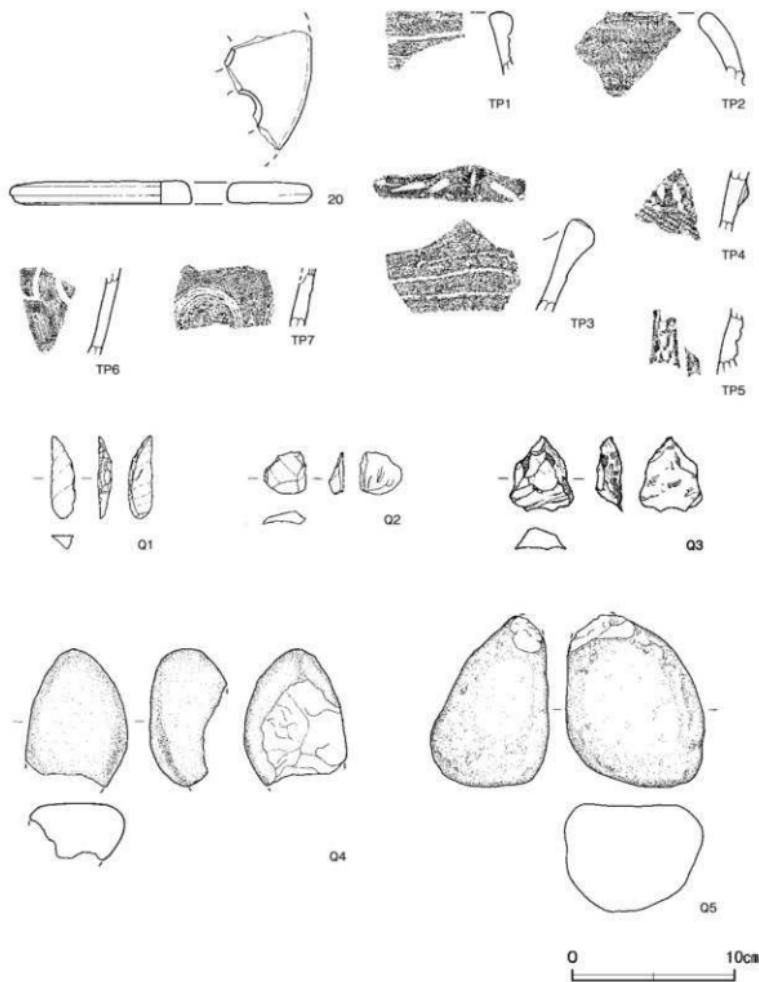
番号	位 置	方 向	形 状	規 模			断 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
1	B43 ~ C44	N - 10° - W	直 繩	(4.96)	0.31 ~ 0.56	0.10 ~ 0.27	8 ~ 20	U字状	縦斜	人骨	本跡 → SD7
2	A1j0 ~ B3e3	N - 71° - W	直 繩	(40.80)	0.26 ~ 0.69	0.05 ~ 0.26	8 ~ 26	U字状	縦斜	人骨	繩文土器、土師器、須恵器 土師質土器、縞器、鉄製品 本跡 → SDS
4	B20 ~ B30	N - 70° - W	直 繩	(31.65)	0.05 ~ 1.26	0.05 ~ 0.76	7 ~ 16	U字状	縦斜	人骨	繩文土器、土師器 SK22 → 本跡
5	B2b9 ~ B2a9	N - 3° - W	直 繩	(2.90)	0.32 ~ 0.45	0.18 ~ 0.25	8 ~ 18	U字状	縦斜	人骨	SD2 → 本跡
6	C5d4 ~ C5e6	N - 70° - W	直 繩	(10.10)	0.36 ~ 0.50	0.24 ~ 0.35	36	U字状	外傾	人骨	
7	B2j2 ~ C5d3	N - 109° - E	直 繩	(34.85)	0.32 ~ 0.82	0.12 ~ 0.26	22	U字状	縦斜	人骨	繩文土器、土師質土器、陶器 縞器、瓦 SD2 → 本跡 → SF1 SF2 と重複
8	B56 ~ C5d0	N - 70° - W	直 繩	(28.73)	0.12 ~ 0.85	0.05 ~ 0.35	8 ~ 35 (逆台形)	外傾	不明	繩文土器、土師器、須恵器	SZ2 → 本跡 SK29 と重複

(5) 遺構外出土遺物(第18・19図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第18図 遺構外出土遺物実測図(1)



第19図 遺構外出土遺物実測図（2）

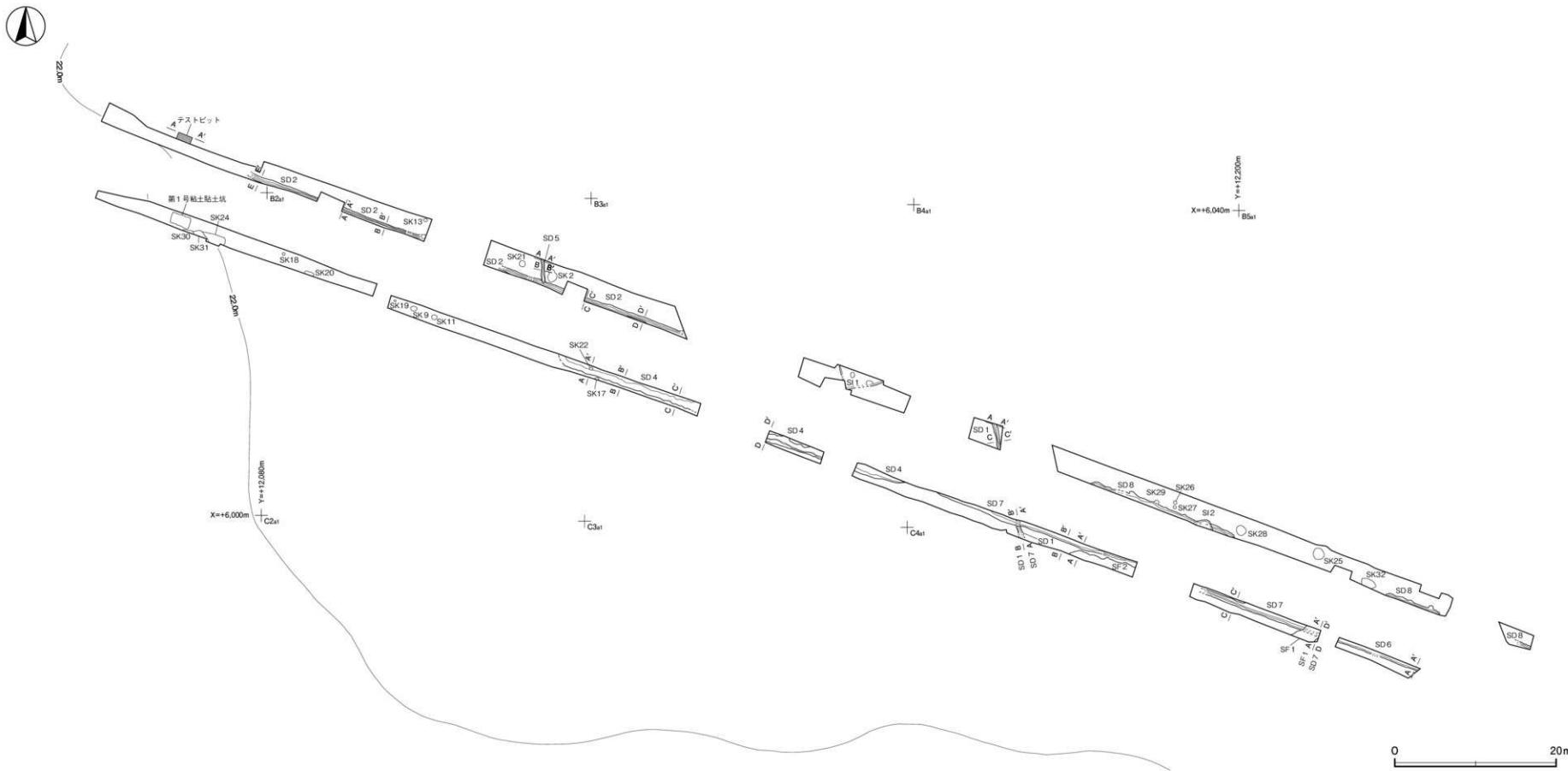
遺構出土物観察表（第18・19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
8	陶器	天目茶碗	[120]	(4.3)	-	精良	にふい痕	良好	体部外・内面鉄輪	SD8	南P1・美濃系 5% PL5
9	磁器	碗	-	(3.4)	-	緻密	明暎灰	良好	外面草花文 下位三重円	表土	肥前系 10%
10	磁器	碗	-	(2.0)	-	緻密	灰白	良好	体部外側二重円 内面二重円 唐草文 底部一重円 路不明	SD7	肥前系 5% PL5
11	陶器	碗	-	(3.4)	-	精良	毛カリーブ	良好	外・内面施釉 5条の曲沈線	SD7	肥前系 5%
12	陶器	皿	[118]	2.4	[6.5]	精良	灰白	良好	ロクロ成形 外・内面施釉	SD7	肥前系 10% PL5
13	陶器	皿	-	(1.6)	[8.5]	精良	浅黄褐	良好	ロクロ成形 外・内面施釉	SD7	产地不明 5%
14	磁器	深碗	[8.0]	2.3	[7.6]	緻密	灰白	良好	外面花鳥風月文	SD7	产地不明 5%
15	陶器	器鉢	-	(4.5)	[14.0]	精良	にふい痕	良好	ロクロ成形 外・内面施釉 9条1単位の捺目	SD7	南P1・美濃系 5% PL5
16	瓦質土器	七厘	[20.4]	(6.6)	-	長石・石英・赤色粒子・細繊維	棕	普通	外側火炎により劣化 内面ナデ	表土	5% PL5
17	瓦質土器	卦	[406]	(11.4)	-	長石・石英・玄母・細繊維	暗灰	普通	ナデ 体部外側継続の縦帶	表土	10% PL5
18	磁器	水注	[5.6]	(1.3)	-	緻密	毛カリーブ	良好	外・内面施釉	SD7	南P1・美濃系 10%
19	瓦質土器	鍋	[178]	5.6	[16.6]	長石・石英・細繊維	淡黄	普通	ロクロ成形 手把貼付	SD7	40% PL5

番号	種別	器種	径	孔径	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土陶質土器	さな	[186]	[2.8]	1.4	長石・石英・赤色粒子	にふい痕	普通	ナデ 孔2か所	表土	10% PL5

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英	にふい痕	RLの單脚縄文 2条の沈線	SD7	PL5
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英	にふい痕	ナデ	表土	PL5
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にふい黄澄	3条の瓜形文 口唇部に棒状工具による刺突文と沈線文	表土	PL5
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・黒色粒子	にふい黄澄	キザシをもつ縱筋貼付 RLの單脚縄文	SD4	PL5
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にふい痕	2条の沈線と棒状工具による連續刺突文	SD4	PL5
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英	棕	手裁竹管による平行沈線文 区画沈線文	表土	PL5
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	棕	撫衝状工具による円形沈線文	表土	PL5

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	調片	5.1	1.5	0.9	5.7	ホルンフェルス	打面は單面磨面	SD4	PL6
Q 2	調片	2.6	2.6	0.9	5.5	珪質頁岩	打面は單面磨面	表土	PL6
Q 3	調片	4.6	3.9	1.6	20.2	黒曜石	打面は單面磨面	SD4	PL6
Q 4	磨石	(8.5)	6.3	4.8	(253.2)	灘灰岩	2面摩痕 欠損	表土	PL6
Q 5	磨石	(10.5)	8.5	7.2	(856.0)	石英斑岩	2面摩痕 欠損	表土	PL6



第20図 満倉北遺跡遺構全体図

第4節 ま　と　め

1 はじめに

今回の調査で、竪穴住居跡2軒（奈良時代）、道路跡2条、粘土貼土坑1基、土坑19基、溝跡7条（いずれも時期不明）を確認し、当遺跡が奈良時代の集落跡を中心とした遺跡であることを確認した。ほかに縄文時代の遺構は確認されていないが、縄文土器が比較的多く出土した。ここでは、当遺跡の周辺を含めた縄文時代、奈良時代の様相について若干の考察を加え、まとめとしたい。

2 遺跡の様相

(1) 縄文時代

今回の調査区から縄文土器片70点が出土している。摩滅が激しいものや細片などにより判別が困難なものを除いた15点は、前期から後期の土器片であることが確認できた。前期は黒浜式1点、浮島式2点の計3点、中期は加曾利E I式1点、加曾利E II式2点の計3点、後期は称名寺II式5点、堀之内I式1点、安行2式3点の計9点である。型式が確認できたものの中では、後期の土器片が半数以上に上っている¹⁾。

周辺遺跡について、当遺跡の北側に隣接する安戸東遺跡では前期から後期、同じく満蔵遺跡では早期から晩期、東側に隣接する満倉東遺跡では中期から晩期、西側に隣接する入山遺跡では中期から後期の土器片の散布が確認されている。当遺跡で確認した時期といずれも共通する時期が多く、当遺跡の周辺で当時の人々が生活を営んでいたことが想像される。今後の資料の増加を待ちたい。

(2) 奈良時代

当時代の遺構として、竪穴住居跡2軒を確認した。

当遺跡が所在する常総市豊岡地区は、結城台地の南部に位置し、各所に小さな谷津が入り込んでいる。同地区内で行われた発掘調査は、1995年の当財団による前原遺跡・大門通遺跡・三本松遺跡²⁾の3か所である。調査の結果、これら3遺跡は古墳時代前期から後期の集落跡であることが明らかになっている。また、当遺跡北側の大生郷地区に所在し、当財団が調査・報告した大生郷遺跡³⁾と宮原前遺跡⁴⁾については、縄文時代及び古墳時代から中世にかけての集落跡であることが確認されている。当遺跡は、同じ結城台地上に所在する大生郷遺跡と宮原前遺跡よりも南側に位置している。これまでの調査結果と今回の調査により、奈良時代の人々が、結城台地の南端部付近でも生活を営んでいたことが明らかになった。

ここで、奈良時代の周辺遺跡の類例として、大生郷遺跡及び宮原前遺跡の住居跡と、当遺跡において確認された住居跡の比較検討を行うこととする。

大生郷遺跡からは8世紀中葉から後葉の住居跡6軒が確認されている。主軸方向は北東方向のものが2軒確認されるものの、残りの4軒はN-2°-WからN-23°-Wと、北方向から北西方向を示している。規模は一辺35~48mで、平面形はすべて方形である。土師器・須恵器などとともに、管状土錘が17点出土している。

宮原前遺跡からは8世紀前葉から後葉までの住居跡19軒が確認されている。主軸方向はN-15°-WからN-38°-Wと、いずれも北方向から北西方向を示している。規模は一辺が30~63mで、平面形は約90%が方形である。土師器・須恵器などとともに、管状土錘が未製品も含めて101点出土している。

当遺跡からは8世紀前葉の住居跡2軒が確認されている。住居跡の一部しか調査できなかつたが、平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向については、第1号住居跡はN-14°-Wで、第2号住居跡は不明ではあるが、北壁側を主軸方向と仮定するとN-10°-Wであり、どちらも北西寄りの北方向を示している。出土遺物は土師器と須恵器である。今回の調査では漁労具は出土していないが、当遺跡西側の低地は旧飯沼であり、東側には鬼怒川が南流していることから、当遺跡についても漁労活動が行われていたと考えられる。

先に挙げた2遺跡と当遺跡では、住居の主軸方向が北方向からやや西寄りであることが、共通している点である。3遺跡の中で宮原前遺跡については、長い期間にわたって集落が営まれていたこと、大規模の住居跡が確認されていること、同時期の掘立柱建物跡が確認されていることなどから、地域の中心的な集落であったとの位置付けがなされている。また、大生郷遺跡の集落については、宮原前遺跡の集落を中心として、その周囲に広がっていた集落であると考えられている⁵⁾。

3 おわりに

当遺跡の調査で確認された奈良時代の集落について、あくまで想定の域を出ないが、大生郷遺跡のそれと同じく、宮原前遺跡の周囲に広がっていた集落の一つと考えてみたい。当時の人々が宮原前遺跡から行動範囲を拡大し、谷津を利用して農耕や漁労を行い、同時期の集落で互いに交流をもちながら生活を営んでいたことが想像される。今回の調査区で確認した遺構や遺物だけでは情報量に乏しく、今後の当遺跡及び周辺遺跡の調査によって、より具体性に富んだ、当該地域の様相が明らかになっていくであろう。

当遺跡の全容については今後の調査事例を含めたさらなる分析が必要であるが、今回の調査成果がわずかでも当地域における歴史解明の一助となれば幸いである。

註

1) 縄文土器の編年については以下の文献に依拠した。

大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』雄山閣 1996年12月

2) 大間武「一般国道354号（水海道バイパス）道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 前原遺跡 大門通遺跡 三本松遺跡」
『茨城県教育財团文化財調査報告』第114集 1996年6月

3) 桜井二郎「大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書－大生郷遺跡－」『茨城県教育財团文化財調査報告』XII 1981年9月

4) 斎藤和浩「宮原前遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財团文化財調査報告』第335集 2011年3月

5) 註4) と同じ

参考資料

茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月

水海道市埋蔵文化財総合調査会『水海道市埋蔵文化財包蔵地分布図』水海道市教育委員会 1992年3月

写 真 図 版



調査区全景（西上空から）

第1号住居跡
遺物出土状況



第1号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況



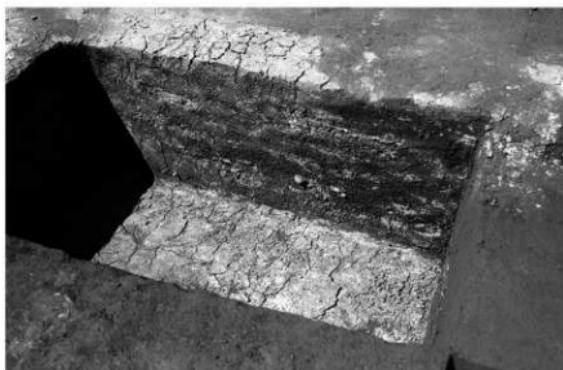
PL2



第2号住居跡
完掘状況



第1号道路跡
完掘状況



第1号粘土貼土坑
遺物出土状況

第 1 号 粘土贴土坑
完 剥 状 况



第 24 号 土 坑
土 层 断 面



第 2 号 满 跡
完 剥 状 况





SI 1-1



SI 2-6



SI 1-3



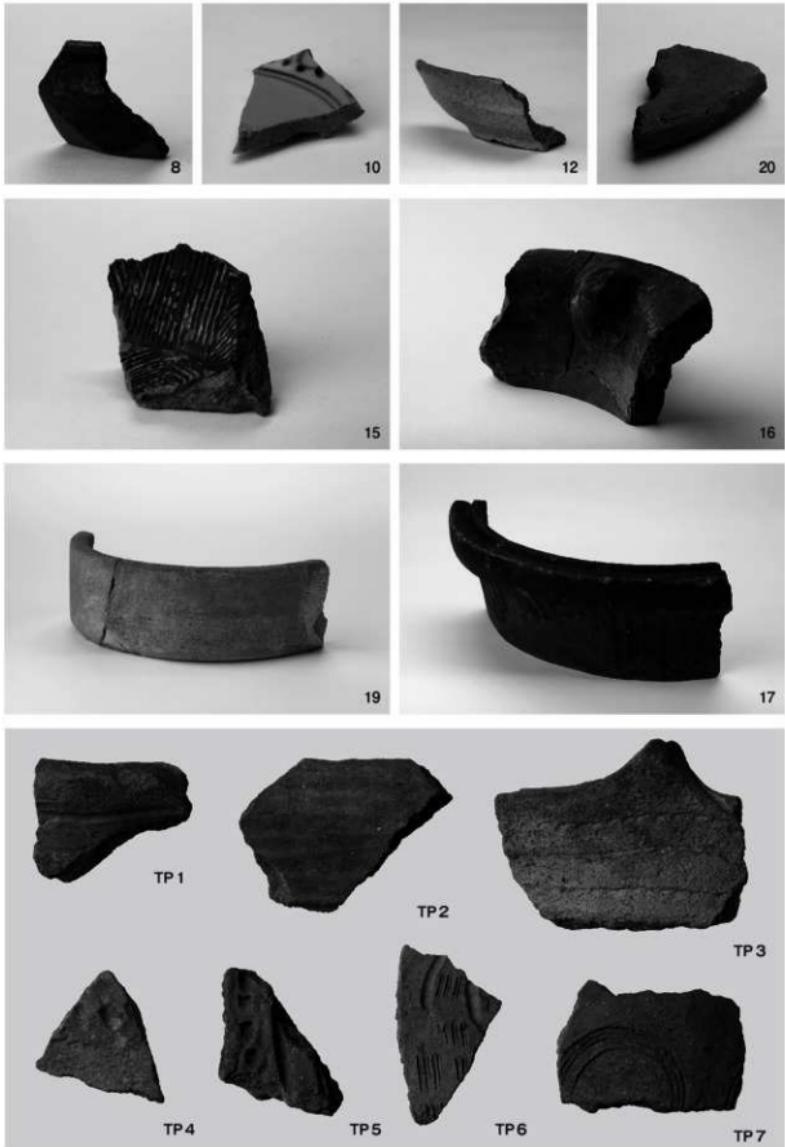
SI 1-4



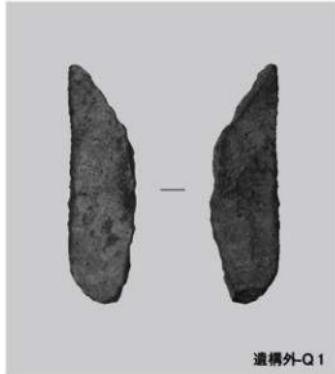
SI 1-5



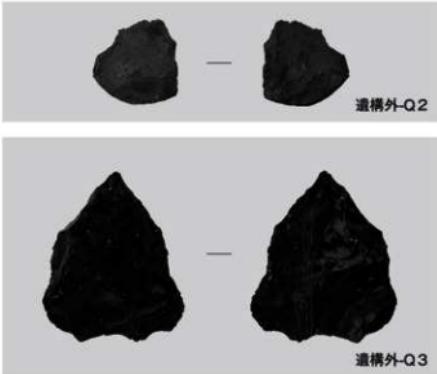
SI 2-7



遺構外出土土器



遗构外-Q 1



遗构外-Q 2



遗构外-Q 3



遗构外-Q 4



遗构外-Q 5



M 3

M 4

M 2

M 6

M 1

M 7

M 8

M 5

第1号粘土贴土坑

遗构外出土石器, 第1号粘土贴土坑出土金属制品

抄 錄

仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7
Home Premium Service Pack 1
レイアウト Adobe InDesign CS5
図版作成 Adobe Illustrator CS5
写真調整 Adobe Photoshop CS5
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
組 版 OpenType13級リュウミンPro・L 基本
Adobe InDesign CS5
印 刷 オフセット印刷
写真製版 スクリーン線数 モノクロ175線
・印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトしたものに入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第373集

満 倉 北 遺 跡

一般県道鴻野山豊岡線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25(2013)年 3月12日 印刷

平成25(2013)年 3月15日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 山三印刷株式会社

〒311-4153 水戸市河和田町4433の33

TEL 029-252-8481